

あて名のない手紙

五代利矢子

あて名のない手紙

著者 五代利矢子 ©Riyako Godai, 1974 Printed in Japan.

一九七四年六月二日 第一刷発行

定価 七五〇円 装幀 森下年昭 表紙写真撮影 幸島正則

発行者 新妻富保

発行所 自由企画・出版 東京都渋谷区渋谷一―二三―二 電話東京四〇七局七八―二番(代)

振替東京一〇三八七〇

印刷所 大日本印刷株式会社

乱丁本・落丁本はお取りかえいたします

序にかえて

正直なところ、本を出すことになろうとは思ってもみませんでした。たまたますすめて下さる人があっても、「書くことも定まらず、文章力ありませんので」と固くお断りしてきました。

けれども、細々ながらマスコミの仕事にたずさわってきた関係で、依頼されたテーマについてなんとかまとめたものが、いつの間にかかなりの量になっていました。これらをとっておいた事に強^しいて理由をつければ二つあります。

ひとつは、これまで自分は、その時々どんな風に考え、迷い、発言してきたかをふりかえり、自戒の資料にしたかったこと。そしていまひとつは、娘が成長して、自分の母親は、自分を育てる日々、どんな心でいたのだろうと或る日ふと、思った時、わずかながら手がかりを残しておいてやりたいといういささか甘い気持ちからです。

今回、それらをまとめて一冊の本にと強くすすめられた時、私はこれまでになく動揺し、なぜか断ることをためらいました。ひとりの仕事を持った主婦が、職場の片隅で、見たり聞いたり迷ったりしたことを、未熟だからといって性急に消してしまわずに、見知らぬ人たちと共に語るといふ願いをこめて、ひとつの叩き台として提出してみようという気持ちで湧いてきたのでした。

テレビの仕事をはじめた折、或る人から「かっこよくやろうと思わぬことです。スタジオオの中ですべったら、勇気を持ってころんでしまうのです。そこに小さな真実が生まれることがある」と言われた言葉を、いま思い出します。

『宛名のない手紙』という名は、誰かの心に届きたいという願望と、結局は、自分自身にかえてくるのではないかという迷いの中から生まれました。宛名がないゆえに、ここに書いたことは、年月を経て再び私のもとに厳しくつき返されるようなおそれを、いま、感じています。

一九七四年三月

目次

ふるさとは遠くにありて	8
名まえ	14
気さくな母は強情っぱり	18
父	22
横山先生	28
らせん階段の灯	31
“女らしさ”とは	36
亭主という名の男	39
女性の地位	42
現代の「内助の功」	45
夫婦の価値観の違い	48
わたくしも“奥さん”が欲しい	51
母性愛って何だろう	55

おしゃれ心 58

お化粧 60

子育てということ 62

ほんとうの教育とは 65

分相応の生き方を 68

性と愛と—— 71

父と子の場合 82

男の子、女の子 84

子どもからみとめられる母親が 88

木を見て森を見ぬあやまち 90

Happy birthday to you! 94

子どもにとっての住まい 96

自然と子ども 99

小さな失敗の教訓 102

わが心に問う 104

高原の花嫁たち 108

若ものたち 111

もっと若い力を! 115

“エリート”たち 117

アルバイトで学ぶ若もの 120

“おとな”へのパスポート 123

物ばなれということ 126

忘れえぬ出会い 129

ちょっと失礼 137

やはり自前の旅が 140

金魚のいのち 144

季節との出会い 147

話し方の落とし穴① 149

話し方の落とし穴② 152

二種類の家 155

花づくりと狭い家 157

この暖かさ…… 160

つきあい 162

歲月不待人 166

老後 169

わたくしのなかにある先祖 — 172

新聞の「見出し」 176

テレビとのつきあい 178

広告の侵略 181

ママの新聞 186

罪つくりな街 189

千円札一枚の汗 192

ホンネ 195

道への期待 199

あて名のない手紙
(今という不安の中にいて)

ふるさととは遠くにありて

仕事の行き帰りなどに上野駅の構内を通りかかると、もう、郷里秋田のにおいがする。

改札口付近で、いま着いたらしい特徴ある面長な顔立ちを見かけると、それら同郷の人々が大事そうに提げている土産の中身は、ハタハタのみそづけや、なめこ、まいたけ、それに新米でつくったばかりのきりたんぽにちがいないと思ったりする。

昭和一桁生^{ひとけた}まれだから、秋田との付き合いのはじまりはお定まりの疎開だった。毎日に激しくなる空襲をのがれようやくたどりついた父母の郷里は、戦時下とはいえ、なにもかもおੱとりと昔風で、痛めつけられた疎開っ子の目には別世界のように見えた。

戦後、そのまま秋田市に住みついて、母の作るタラやハタハタの郷土料理をたんのうし、竹スキーや「ドッコ」と呼ぶ底に金具のついたげたで雪の坂道をすべって歩くころには、秋田弁の方もだいぶん板についてきた。

終戦と同時にすべての価値観が百八十度転回し、いわゆる民主主義という名のもとに新時代に向かってだれもが歩きはじめた機運の中で、併設中学、高校の六年間を、秋田北高

校でお世話になった。

はじめのころ、放課後の雨天体操場には進駐軍の兵士たちがよくバスケットをやりにきていた。ジープで乗りつけてくる彼らのバタ臭いふん囲気や、お互いに冗談を言い合ってゲームを楽しんでいるさまなどが物珍しくて、大勢で暗くなるまでながめていたが、いまにして思えば女子高だけに先生方の気苦労も大変だったろうと思う。

やがてそうしたことなくなり、同じ体操場でさまざまな催し物が行われた。中川善之助氏の民法の話、市川房枝氏の女性問題、巖本真理、諏訪根自子氏のバイオリン等々。一高校にしてはぜいたくともいえる多彩な顔ぶれであり、当時の武藤箴満太校長のご配慮をいまさらのようにありがたく思う。

まだ物資も乏しく満足なズックぐつもなかったし、体操場の隙間風が身にしみることもあったが、それ以上に、鋭く美しい旋律や、熱のはいった講演が、感じやすい若い心をゆさぶった。

敗戦は田舎の生活にも大きな変化をもたらした。空襲を知らない郷里では、紺サージのセーラーも、黒い詰衿つめえりの学生服もあったが、疎開っ子にはそれらがなかった。母はお雛さまの緋毛氈を持ち出してきて自分で黒く染めて兄のマントをつくった。布が斜めに裁てるだけの幅がなかったからそのマントを着ると兄がこけしのように見えた。そのマントは間

もなく染めがはげてきて、当時、兄のあだ名は「赤マント」だった。

そのうち母が長い間の疲れで入院した。父に仕え家事をきりまわす役はその日から兄妹の仕事になった。そんな時でも父は全く生活習慣をかえず平然と客を招いたから、兄は肉屋と八百屋に走り、妹は見よう見まねの客料理を必死になってつくったりした。そんな事が続いて高校を半年ほど休んだ。休学するつもりはなかったが、主婦の仕事が忙しくて学校へ出かけられないのである。半年のブランクは大きかったが、それでもあまり深刻がらずに過ぎてしまった。一度、東京から姉が心配して見にきてくれて、私の手の荒れに驚いたが、若い時は生きる力も旺盛だったのだろう、そんな間隙をぬってオリビエの「ハムレット」やジャン・マレエの「トリスタンとイゾルデ」の現代版を息をこらして見た記憶がある。

ほとんど戦火をうけていない街並みは、どこを歩いても、その町その町の小さな歴史を感じさせる。町名も鷹匠町、鉄砲町、大工町、魚町、米町、茶町、台所町と城下町をしのばせるものが多かった。高校のころに移った金砂町の住まいは、町はずれの隠居所風で、家のすぐ前を旭川が流れ、庭先から朝な夕な太平山をながめることができた。この旭川が街を東北に割って、内町と外町という名で、武家屋敷と町人町を分けていたと、母から聞いた。

その川でスカートをたくし上げて水遊びをし、長く続く緑の土手に寝ころんで流れる雲を見つめたり、春ともなればみそ汁に放つフキノトウやヨメナを摘みに出かけたりして、いまからみればすばらしい自然に囲まれていたわけだけれども、遠く鉄橋を渡る汽車などをながめると、無性に「東京に行きたい」と思う事もあった。同じ市内には新憲法下の第一回の総選挙で女性として初当選した和崎ハル女史もあり、農民文学の伊藤永之介氏が、家の前にかかっていた橋のたもとを着流して散策していたのも印象的だった。

つつじのころの千秋公園、お堀のハスがいっせいに淡紅色の花をつけ出す広小路の夏、雪あかりの川反界限——どこをとっても絵になる街だったが、そうした風景が独特の趣で胸に迫ってくるのは、夢中で過ごした青春の思い出がそれらの風景に重なるからかもしれない。

「日ごとに春めいて参りました」とか、「梅だよりもちらほらきく毎日でございます」といった書き出しではじまる手紙をもらうことが重なって、改めて春の近いことに思い至る。というのもお正月以来、暖かい日が多く、とりわけ都心住まいのせいかな、身にしみるような寒さとの出会いも少なかったから、年が明けるともう春になったような気分で暮ら

していた。それは、あの胸のときめくような春待つ心とはほど遠く、暖かだけを当然のように受け取っていたためである。

これが雪深い東北や北陸であれば、いくら暖冬異変といってもやはり春の訪れは、天の恵みとして両手を差し出すような気持ちで迎えるものであるにちがいない。かつて疎開先の秋田で、雪解けの道にかげろうが立ちのぼり、湿り気を含んだ甘い風が頬や首筋をなでると、子ども心にも思わず大声をあげてかけ出したくなったものだった。冬中の湿り気を吸い込んだようなオーバーをぬぎ、首筋の風をしっかり皮膚でうけとめて溶けかかった雪のかたまりを長靴でひとつひとつぶして行くと、その下にある黒い土がムクムクと立ちあがってくるような気がした。

そこで、試みに当時六歳になった娘にどんな時に春がきたってわかるかしら、とたずねてみたら、彼女は少し考えてから「カレンダーでわかる」と答えたのには恐れ入った。

たしかに都会で暮らしていると、季節感はどうどん乏しくなるし、庭は狭くて樹木の微妙な移り変わりに出会うこともない。たまたまそのことを仕事場でいっしょになった人に話すと、

「私の生まれた家なんか、町のまん中でしかも商売屋だったから、庭なんか全くなかったですよ。それでも季節感があったなあ」となつかしそうに言う。店は表通りに面してい

て、両隣も商家、奥は土蔵でほとんど土のない住まいだったそうである。日のさすところといえば、わずかに母屋と土蔵の間の屋根の切れ目からさし込む光だけ。そこに植木バチが幾つか並べてあって、家中でたいせつにしていた。夏になれば、つりしのぶを軒先に下げ、朝顔市、ほおずき市には両親や店の人とでかけたという。

そういえば、かえって町中に住む人達の方が季節の移り変わりを大事にし、小さな植物にも心を注いできたのかもしれない。植込みも立派な庭もあるところで育った子どもでも、道端の草花を踏みつけても平気だったり、通りすがりに芽吹いている枝をポキリと折ったりする。

要は住む環境ではなくて、どんなに小さなものにも心を寄せ、ささやかな変化にも心を動かすような気持ちがあるかどうかに育っているかどうかである。

そうであれば、春が来るかどうかはカレンダーでわかるとすまして答えた娘を、都心に住んでいるせいばかりにはできないゾと、改めてわが身に言い聞かせた。

ふるさととは、そこで育っていく多感な子ども心とそれを取りまく自然とがおりなす、それぞれの胸に秘めたシンフォニーかもしれないと思う。

自分の名前がイヤでイヤでたまらないと感じはじめたのは、小学校へはいったころからだったと思う。

友人はみな由紀子だったり、綾子だったりして、少女小説のヒロインをおもわせる優雅な名前だというのに、わたしの名まえ「利矢子」ときたら語呂も字形も妙ちきりんで子どもの世界にはなじみにくかった。

第一、子どものころからいままで同じ名の人に出会ったことは一度もない。おとなたちが無造作に、

「お名前は？」

ときくたびに、イヤーなきもちであった。というのは答えると決まって、

「りやこちゃん？ まあ変わったお名まえね、どう書くの」とくる。

漢字で説明できる年ごろになると、いささかやけっぱちになって、

「利益の利、弓の矢、それに子です」

と問われぬ先から答えもした。すると、

「まあ、利を矢で射止めるってわけね、ずいぶん欲ばってること」

などと面白そうに笑うオバサンもいて、ますますユーウツになる。だから子供心にも、優雅な名でなくたっていい、せめて良子とか幸枝とか平凡であればいいのにと、うらめしさはつのる一方だった。

ある時、その張本人である父に向かって聞いてみたことがある。父は昔風の気ままな人間なので、おこらせないようにと子ども心にも用心してかかる。

「どうだ、いい名だろう」

とまず予想はずれの答えがあって、

「ねえ、どういう意味なんですか」

と食い下がると、

「うーむリヤ王のリヤだよ」

とニヤリとする。

「うそばかり」

「リヤカーのリヤでもいいな」